
命を懸けた誓い

鴉輝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命を懸けた誓い

【Nコード】

N1330F

【作者名】

鴉輝夜

【あらすじ】

主人の悠一と使用人の雅人、泥棒の真奈美。だが意気投合した悠一と真奈美だが悠一が嫌いな父が刑事であるがために離れ離れになってしまう。だかそんな二人に更なる過酷な事が…！そして、雅人との関係は…！

第一話：生きた時間と幸せ

六年前の事は一生忘れはしないだろう。

だって僕、中嶋雅人は生きる事を諦めた事があった。その時に僕を救ってくれたのは、松下財閥の跡取り息子の松下悠一坊ちゃんなのだ。

あの日、突然、家に強盗が来て、いきなり包丁を突き出して“金を出せ”って脅された。当然断った両親は金を捕るだけのために殺された……。

僕は金もなかったし電気代などの生活費も払えない。もう僕は絶望的だった。そして家売る事を決意した。

僕はビルの路地で、ずっとしゃがみ込んでいた。雨が降っていたから、びしょ濡れだった。あの時の僕は両親と一緒に死にたいって思っていた。

今なら考えつかない事だけどね…。

第二話：追われる身

俺の名前は松下悠一。一応松下財閥の息子だ。まあ浦岡高校の一年生だが俺は金持ちの事を隠している。だつて金持ちだつていたらもつと女子が寄つて来て困るだけだし、ただでさえモテるっていうのに……。

まあ家に帰ったら使用人の中嶋雅人がいるからまだマシな生活をしているのだろう……。

そう思いながら授業をうけている。今日は大半実力テスト返してテストの問題の解き方を教えてもらっている。俺には必要なことだけど、他の人は必要あるみたいで一生懸命聞いている。

しかも各クラスに貼られている大きな実力テストの順位表は嫌でも目につく。まあ悪くないから、まだいいけど……早く普通の授業に戻らないかな？ 答え合わせだけじゃ暇でしょうがない。

あれこれ考えていると、授業の終わりのチャイムが鳴り響いていた。後は倶楽部活動だけだっと思うとため息がでた。まあ科学部だからいいけど。

そつと理科室のドアを開けてみる。また女子の新入部員が来ているかと思うとそつとする。今時の女子は、好きな先輩やイケメンがいるからという理由で入ったとかマジでウザりたい。

まあそんなこんな考えながら理科室のドアを開ける。すると部長がいたから一言いった。

「ウイっす。」

「よっ！また笑わないね。笑わないと疲れないのかい？」

「こっちのほうでいいですから。」

部長はいつもそうだ。馬鹿な事を言いまくるし女たらしだ。でも、科学実験をしているときは、真面目な顔をして真剣に取り組んでいる。俺の一番苦手なタイプなんだ部長は。部長は言い返してきたよ。全く鬱陶しい！

「そんなもんかな？！しかも女の子入って来ないしさ。」

「毎日入って来たら困ります。しかも、十分女子いますよ。いえ、多すぎるくらいです。普通は39人もいませんが。それに全員が茂様とか大石様とか大石茂様なんて呼んでいたら気持ち悪いですよ。」

「気持ち悪くないし、いらなんなんて、可哀相な事いっちゃダメだよ。」

ウザったい！凄くそう思った。早いとこ逃げようと思い、こう言う。

「それでは、これで失礼します。」

俺は理科室を後にする。後ろから聞こえる。変な音。足音っぽい。不気味だ。そのまま立ちどまり、後ろを振り向くが何もない。というか誰もいない。だけど、つけられてる！誰か後ろにいるのは確かだ。慎重にばれないように、分析をしたほうがいい。歩きながら分析を始めることにした。

第三話：分析開始

まあ分析といっても何をするかなんて知らないけど、何となく思うんだ。

たいした奴じゃないって事が！

だって凄い人なら、俺はまだ気付いていないはずだろうし…。

まさか！！……しかし。

つと頭の中であらゆる推測をしていた。こんなに尾行が下手なんだつたら、高校生くらいだろうから、俺の家がばれるのはあまりよくない。

それに、もし学校の人間だったとしたら金持ちだって事がばれてしまうし、かといって、そのまま後をつけられるのはチョット困る。どうしたらって考えるまでに家についてしまう。まあここは一か八か逃げるしかない！

ピタつと足を止めると、後ろの奴も足が止まる。俺はすつと横にある家と家の間の道を通り、そこら辺を全速力で逃げた。

ハアハアと息をもらして少し回りをみて

撒いたか？

つと思つたから足を緩めた。それで、かなり疲れていたから木陰に

隠れて携帯で車を呼ぶ。

ブルルルル…ブルルルル…

そして電話に出たのは、俺の使用人の雅人だった。早速問い掛けてきた。

「もしもし、お坊ちゃん！？どうなさいましたか！？」

「雅人か！？今すぐ、迎えの車を呼びたいのだが！？」

「はい。わかりました。場所は何処に御呼びしますか！？」

「え」と…中泉公園までだ。」

「はい。承知しました。」

俺は電話をきり、携帯をポケットにしまい。目の前にある中泉公園の中まで歩いた。流石に夕方6時には、子供が一人もいない。静かだ…。俺は木の下に座り、こんな事を考えた。

後ろから追ってきたやつは、今何処にいるんだ！？しかもアイツは何者だったのか！？疑問が沢山でた。数えきれないほどに…

ブルルルル…

車の音が聞こえてきた。どんどん音が大きくなっていく。すると車は公園の前で止まった。

やっときたか

俺は車に近寄って思った。

家にこんな車はあっただろうか！？

すると車のドアが開いた。黒い服で身を包んだ男が二人ほど出てきて、こちらに近寄ってくる。

なんなんだ…？

こいつら…？

危険だ！

頭で理解しているのに身体が逃げろって言っているのに動かない。

動けよ身体！動けー！！

男達が俺の前に立った。そして俺の肩を触る。

駄目だ！やられる！

すると五時のチャイムが鳴り響いた。

俺は我にかえり、俺は黒い服で身を包んだ男の手を払いのけて、敵との間をあける。

なんなんだよ

こいつら…！

何者なんだ！

ブルルルル……

またもう一台車がやって来た。

俺の家の車が来たのか……？

いや違う……！

黒い服で身を包んだ人たちの仲間だ……！

第四話：狙う者と守る者

黒い服で身を包んだ人が四人ほどでくると俺のまわりを取り囲んで捕まえようとして来た。

まずい…

逃げきれない…

逃げきれぬわけがない。

でも…

ダメだって決めつけたくない。

諦めたくない

いろいろと考えている間に黒い服で身を包んだ人は目の前まできていた。

俺はそつと後ろをみる。

そこには黒い服で身を包んだ人はいなかったがコンクリートの大きい壁ががちりと立っていた。

その時、車の音が聞こえてきた。

このエンジンの音は俺の家の……………。

雅人…

心の中で自分の使用人の名前を呼ぶ。

その時に黒い服で身を包んだ人が何かコンクリートのようなものを振りかざしているのが見えた。

気付いた時にはよける事ができずに俺はなぐられた。

目の前が真っ暗闇につつまれたけど雅人の声は聞こえた。

「悠一坊ちゃん…！？」

「坊ちゃん…ッ！」

雅人は唇を震えさせながら言った。

「お前らか…！？坊ちゃんを……！悠一坊ちゃんをこんな血だらけにしたのは…！？」

僕は睨みつけた。

黒い服で身を包んだ人が答える。

「そんなにこのガキが大切か！？」

「答えになってない！！とにかく坊ちゃんをかえせ」

僕は坊ちゃんが心配で心配で仕方なかった。

「嫌だといったら…！？」

と黒い服で身を包んだ人が挑発する。

「力ずくでもかえしてもらっただけだ！」

と言つて僕は黒い服で身を包んだ人達の所に向かつて走りだした。

そして腰にかけてある小刀を手にとり黒い服で身を包んだ人達の隙間をついて一人をきりつけた。

黒い服で身を包んだ人達の中の一人が倒れた。

それを見た他の黒い服で身を包んだ人達がうるたえはじめた。

その隙間に僕は坊ちゃんの所に駆け寄つた。

坊ちゃんは血だらけで今にも死にそうな感じでコッチを見ていた。

僕は少し泣きそうになつた。

「雅人……。」

「悠一坊ちゃん！」

「さ……っ……………きの……………ゴホゲホ……ッ！」

「喋らないで下さい！命に関わります！」

すると叫び声が……！

「ボサツとするな……！さつさとそのガキを殺れ！」

はっ！！

黒い服で身を包んだ人達がこっちに向かってくる。

また叫び声が聞こえた。

「雅人！悠一坊ちゃんを早く車に……」

中道さんだ…。

中道さんは坊ちゃんの良き理解者である。

そんな中道さんを見捨てる訳には……

「でも…中道さんは…！？」

「馬鹿野郎！お前は坊ちゃんを守るんだろうが！！俺に構う暇があったら坊ちゃんを助ける事だけを考えろ…！」

「……………はいつ！」

僕は辛かったけど走った。

坊ちゃんを抱えて歯をくいしめながら…。

『守る』という本当の意味を僕は知った。

何かを犠牲にしなければ何も手に得る事は出来ないと同じで誰かを犠牲にしなければ誰も救えない。

でも僕はそんな自分が嫌いなんだ。

犠牲にしたくない…

僕は一人だけじゃなくもつと多くの人が救いたい。

誰の犠牲もなしに救いたいんだ。

坊ちゃん……

坊ちゃんならこんな時……。

と考えた。

そして僕は車に坊ちゃんに乗せて運転手に言う。

「坊ちゃんをお願いします。僕はここに残ります。」

「えっ！？でも…」

「お願いします…」

「……はい。承知しました。」

「無茶言ってごめんなさい。」

黙ったまま運転手は俯く。

僕は………

と思い意識のない坊ちゃんを見て言う。

「ごめんなさい……坊ちゃん……僕は…僕は…初めてあなたに背きます…。」

僕は拳を握りしめた。

そして運転手の方を向き軽く礼をする。

車のドアを閉めて犠牲者を出さないために走った。

第五話：死者0人

中道さん大丈夫かな！？

生きるという意味と同じで中道さんの命を背負って一歩でも前に進まなければ…

中道さんの後ろ姿が見えた。

中道さんを見たとき思った。

やっぱり中道さんはすごい！

怯む事なく黒い服で身を包んだ人達と闘っている。

技を軽やかに避けてカッコイイ…

僕は立ち止まった。

でも僕は中道さんを救えるのかな…！？

ただの足手まといになるんじゃないか！？

でも…僕は…後戻りしないって決めたんだ！！

中道さんは怯まず闘っているじゃないか…

僕が怯んでどうするんだ。

また僕は走り出した。

中道さんが敵に後ろを取られた。

僕は中道さんを失なわないために全速力で走った。

走りながら僕は黒い服で身を包んだ人達の中の一人を殴った。

手は少しぴりぴりして痛かった。

でもそんなことは言ってられない。

「なんで戻ってきた!？」

中道さんは僕にそう言っただけじゃ駄目なんだ。

「坊ちゃんならこうするだろうし……」

僕は続けた。

「もう誰も失いたくない。逃げてるだけじゃ駄目なんだ。」

中道さんはもう何も言わずにいた。

知らない間に黒い服で身を包んだ人達は俯けになって倒れていた。

黒い服で身を包んだ人達の仲間が乗っていた車はもう何処にもなかった。

中道さんはポンポンツと俺の肩を叩いて言った。

「帰るぞ…坊ちゃんの所へ」

優しい声だった。

何故かホッとした。

「はいつ！」

と言い車を呼び坊ちゃんのいる所まで向かった。

第六話：思想

俺が目覚めたのはいつものベッドだった。

横には雅人がいた。

「雅人か…」

「坊ちゃん…気がついたんですね♪」

俺は安心した。

不安が一気に吹き飛んだ。

「雅人…いったい何があった!？」

ため息をつきながら聞いた。

「誘拐としか言えません。犯人すら分かっています。ですが坊ちゃんは今1番しなければならぬ事は安静ですから。」

心配症の雅人に嬉しく思うよ。

「ああ…分かっている。すまない…いや？ありがとう。」

照れながら雅人は言った。

「僕だけじゃありませんよ。中道さんが助けてくれたんです。僕だけじゃ坊ちゃんを助け出せなかったですよ。」

中道さんか……

あの人は武道の達人だからな

それにしてもただの誘拐にしては変だ。

普通ならあんな奴ら（黒い服で身を包んだ人達）を使うだろうか？

使うとしてもあの人数はあまりに多すぎる。

どうする……？

「…坊ちゃん？」

まずいΣ！

黙ったままだった。

「あついや？なんでもない。ただ…中道さんが心配でな。」

ごまかせた…か？

「坊ちゃん！」

ビクッΣ！

「中道さん呼んできますよ。」

といつてでていった。

ふう〜天然でよかった。

いや？天然というより馬鹿か…

まあ中道さんが来たら話を聞けばだいたい推測はつくだろう。

雅人が呼びに行つて5分…

広いからつていくらなんでも遅すぎる…

行つてみるか…

ベッドから足を下ろして立つてみた。

フラフラして頭が痛い。

まあいい…。

数歩歩いたらドアがあった。

ドアを開けると怒鳴り声が響き渡っていた。

第七話：親と子

あきらかに親父の声…

3メートル先で雅人が怒られている。

親父は手を振り上げ雅人を殴ろうとしていた。

俺は叫んだ。

「っ！やめて下さいよ。おとなげない。」

親父はこっちをみた。

と同時に雅人がいう。

「坊ちゃんッΣ！今は安静にしてください。お体に障ります。」

まったく…自分の心配より俺の心配かよ。

ため息をつきながら雅人のそばまで行く。

「ほら行くぞ…！」

「はいっ！」

俺は中道さんの部屋まで行く事にした。

だが親父に呼び止められた。

「待て…」

その声は怒鳴り声がおさまり冷静になっていた。

「何の用です!？」

と負けないように言い返す。

「その使用人の処罰をしておけ」

あざけ笑うように言ってきた。

「お断りですよ…Σ雅人は俺の使用人です!」

きつぱりと断った。

「ならばこれは命令だ。できねば切腹だ。」

無理矢理押し切ってきた。

「くっ」

そのまま続けた。

「卑怯ですよ。あなたに指図される事などないはずですよ。」

俺は雅人の前にたった。

「ならば自分の手で処分するまでだ。」

親父がこつちに歩いてくる。

俺の前に立って吐き捨てた。

「どけっ悠一」

俺は親父を睨みつけて言う。

「断る。」

言っと親父は手を挙げ振り上げそのまま俺のところへ飛んできた。

「うわっ！」

俺はそのまま吹っ飛んだ。

そして花瓶を立てている土台にぶつかり上の花瓶が転がり落ちてきた。

「坊ちゃんっ！」

気がつくと花瓶はほとんど当たっていないのに沢山の血が上から落ちてきた。

見上げると雅人が血だらけで俺を支えていた。

明らかに俺を庇った事がわかった。

「雅人っ！」

少し怖かった。

そして雅人は口を開いた。

「坊ちゃん…無事ですか？」

また俺の心配……

「まったく！俺は大丈夫だから自分の事を考えろ！」

雅人は俺の不安を気付き無理矢理笑った。

辛かった。

そして親父はあざけ笑うように言った。

「まあこのくらいだな。」

俺はそんな親父が許せなかった。

「クズですね。あなたは……」

だが親父は俺の言葉を無視して歩き去ろうとした。

だから俺は親父の腕を掴んで挑発した。

「逃げる気ですか！？自分の過ちを見つけて貰えませんか？雅人に謝ってください。」

目の前には花瓶の割れた音に駆け付けてきた中道さんがいた。

親父はそんな事どうでもいいみたいに俺の手を払いのけ言った。

「触るな！…汚らわしい。」

俺は睨みつけた。

もう親父のこんな言葉は慣れていたからなんとも思わなかった。

そして親父は続ける。

「お前など生まれて来なければよかったんだ。」

第八話：存在の否定

俺はあんな言葉平気だと思っていた。

だけど気付くと頭の中が真っ白になってぐちゃぐちゃになっていた。

親父が去っていくと辺りは中道さんしかいなくなった。

「くっそおおお!!」

俺は負けた。

あんな親父に…

俺のプライドはぐちゃぐちゃだった。

その後、中道さんは俺の肩に手をおき、そのまま雅人を抱かえて去っていった。

俺はそのまま跪いた。

その時に誓った…。

もう泣かまいと…

生きるという大きい壁を超える事が出来たのか、今の自分には分かっていなかった。

そして人を信じる事をやめた。

雅人も中道さんも……ッ！

部屋に戻り、いつものようにハーモニカを握り屋根の上にのぼった。

そして空を見て呟く。

「そうだ…今日は満月かぁ。」

満月をみた俺は悲しみなど消えてなくなっていた。

満月はそんなモヤモヤ感を吸い取ってくれた。

誰も信じなくてもいいような、そんな気持ちになれたんだ。

そしてハーモニカを吹く。

いつもよりいい音がした。

でも何処か悲しい感じがした。

俺がいつも吹いている曲は『COSMOS』なのだが…

今日は違う曲を吹いているように感じた。

今日はいつも見える街が騒々しく荒立っていた。

一時間ほどが経過すると…

ひょいと屋根の上を走って俺の前で立ち止まった。

ハーモニカの音色は止まりそいつの方をみた。

そいつは目を丸くして俺を見つめた。

暗闇の中に目だけがうつっていた。

「誰だ…？」

俺はそいつに言った。

そいつの顔がハッキリ見えたのは満月をおおっていた雲が晴れた時だった。

……女？

俺はもう一度聞いた。

「誰だ？泥棒か？」

その子はクスッと笑った。

そして声を発した。

第九話：真奈美

「えー？私の事知らないのー？珍しいね。」

続けて彼女は言った。

「まあいいやー。特別に教えてあげるよ。私は今、有名な泥棒の真奈美だよ。」

やけに明るくめんどくさかった。

「・・・ふーん。そッ。」

とあっけなく答えると不思議そうにこっちを見た。

あまりにも気持ち悪いので聞いてみた。

「なんだッ？」

「だって驚かないんだよ。変なの。」

といい笑った。

俺は少し驚いた。

はじめて会った奴に普通笑顔を見せるのだろうか。

普通は警戒して笑顔どころかべらべらと喋らないだろう。

俺から簡単に逃げれると思っているのだろうか。

まあどうでもいいが…

あれこれ考えていると真奈美は口を開いた。

「ねえもう一度そのハーモニカ吹いてくれない？すごく綺麗な音色

だったから」

俺のハーモニカの音色を聴いて喜んだり、綺麗って言った奴は初めてだった。

俺は嬉しかったのだろう。

だから今、俺はハーモニカを吹いている。

30分の間、真奈美は目をキラキラさせながら、俺のハーモニカを聴いていた。

曲が終わると真奈美はニツコリ笑い言った。

「凄く綺麗だったよ。ねえ毎日吹いているの？」

「毎日とはいいきれないがほぼ毎日だ。」

と答えると即答してきた。

「また聴きに来ていい？」

俺は驚いた。

真奈美には驚かされてばかりだった。
そして思った疑問を言ってみた。

「ただハーモニカを聴くだけなのに暇じゃないのか……？」
その答えは呆気なく返ってきた。

「暇じゃないよ。逆に楽しいよ○（＾・＾）○」

「お前珍しいな」

嬉しかった。

初めてだった。

こんな気持ち……

「やっと笑ったね。」

っとニッコリして言った。

知らなかった。

気付かない間に真奈美を自分の心の支えにしていた。

真奈美と話していくにつれて俺は真奈美にだけ本心を見せるようになっていった。

次々に会話が進み大分時間が過ぎていった時だった。

「ゴメンー！もうそろそろ時間だ。次ここに来る時はこの窓に手紙挟んでおくから、また今度。それと私と出会った事内緒だよ。」

と真奈美は言うと言根の上を走り去っていった。

その後、月を見て俺は自分の部屋に戻った。

電気をつけずに

少し窓を開け外を見渡した。その時に部屋のドアが開いた。

第十話：屋根裏部屋

はじめは誰だか分からなかったが、それが中道さんだと気付いた。

「電気を付けずに何をやってるんだ？悠一。」

と聞いてきた。

「いえ。別に……。それより雅人は無事ですか？」

「ああ。大丈夫だ。」

少しホッとして聞いた。

「そうですか……。一つ頼まれてくれませんか！？雅人に違う仕事をあたえて下さい。これ以上あんなに傷つく姿見ていく事が出来ない。自分の身は自分で守れます。」

中道さんは驚いて即答出来ないみたいだった。

「お前の気持ちはいいかもしれないな。だけど雅人の気持ちはどうなる？」

「それも考えたが……..
いや、いい。さようなら」

俺はハーモニカを持ち自分の部屋を飛び出した。

格好悪い…

と思いながら走った。

長い長い廊下を走り、誰もいないか確認して屋根裏部屋へ行く為の道具を隠し扉から出した。

そして屋根裏部屋への扉を開け屋根裏部屋に入った。

この仕掛けを作った自分に今は感謝していた。

屋根裏部屋に入る為の隠し扉を作るのは夜に部屋を抜け出したりしても三日間も掛かってしまった。

屋根裏部屋の掃除も大変で仕方なかった。

屋根裏部屋は家中を動き回れる程だった。

窓がない事に気付いたから窓も盾突けた。

そして家具などを運ぶ作業も大変だった。

皆知らない。

そんな屋根裏部屋は解放的で好きだった。

屋根裏部屋は俺がいつでも出ていけるぐらいの荷物は揃っていたし計画だって立てれる。

そしてこれから外へ抜ける道を作る事だった。

俺は気が付いた。

真奈美と屋根の上で出会った。

屋根を渡ってバレないところに降りればいいだけだって事を……。

俺は家の全体の見取り図を想像した。

この屋敷が一番奥の屋敷で横の屋敷がある。

そこには隠れやすいスペースがある。

しかも全然人が通らない。
完璧な場所だった。

第十一話：親父

後、屋根から降りるための隠し梯子をつくるだけだった。

だがそれは困難だった。

俺がいない事で皆が探している。

そして誰かの声が高く響き渡った。

親父だ……………。

俺は床に耳をあてた。

「悠一は、ここらへんに隠れているはずだ…！外では目立ちすぎ噂
になっているからありえない…！雅人を人質にとれ！必ず出て来る。」

まずい事になった…！

抜け道さえ作る時間も与えてくれなかった。

折りたたみナイフをポケットに入れると窓に近寄る。

窓から無理矢理でて下の窓から侵入し雅人の所へ向かった。

パンツ！！

俺が急いで雅人の部屋を開けるとドアが開く音がなり響いた。

そこには寝ている雅人と中道さんがいた。

中道さんはいきなり立ち上がり言った。

「お前何処行っていたんだ！皆お前を心配したんだぞ。」

心配という言葉初めて聞いた。

「その事は後です……。奴が雅人を狙っている。」

少しの沈黙があり、やっと口を開いた。

「どういつ事が話してくれるな？悠一」

足音が聞こえる…。

中道さんの声はもう届かなかった。

「来る……………」

独り言を発しドアの方を睨みつける。

足音はドアの前で止まりドアノブが動くのがわかった。

俺は親父の入ってくるのを待った。

そしてドアが開く……………。

どどん親父の姿が見えていくとあたりに異様な空気が流れた。

その後、気付くと親父はもう中に入っていてドアは閉まっていた。

一番最初に口を開いたのは親父だった。

「ほう…………。先ほどの話しどうやって聞いたかは知らぬが駆け付けて来たみたいだな。」

気持ちをおさえながら言い返す事が精一杯だった。

「雅人を人質にして、おびき出そうという最低なお考えを述べられた時には、あなたを刺し殺そうとかと思いましたけどね…………。俺はこの家を出ます。それが許されないならあなたを殺しても出ていきます。」

ポケットからナイフを取り出し親父の方にむけた。

親父は何も恐れずにあざけわらうように言った。

「すえ恐ろしいガキだな…。捕まえて牢屋にぶち込んでおけ！ ただし殺すな」

後ろから出てきたのは家のSP達三人だった。

第十二話：夢

くそっ！

ここで逃げたら中道さんと雅人が…！

俺はナイフを構え突っ込んだ。

S Pもナイフを取り出す。

そしてS Pは俺の攻撃をナイフで対処する

カキンッ！

ナイフがぶつかり合う。

俺は一人を払いのけ間接を外した。

あと二人……

………っ！

視界が歪む！

頭がズズキ痛い

頭から流れている何かが床に落ちる。

前からも流れている…

服で拭き取ると血がついていた。

誰かが叫んでいる……

中道さん？

いや違う……

中道さんも何か叫んでいるが違う………？

聞き慣れた声…

俺はふらついて跪いてしまうと、また聞き慣れた声がした

まさか

雅人…？

俺はそのまま倒れてしまった。

俺は夢をみた。

幼い頃の俺は母様の死を悔やんでいた。

母様は眠ったように死んだ姿が目の中に溢れ出した。

映像が白い靄で見えなくなると目の前に母様が現れた。

「母様…。」

母様は夢の中で俺に囁いた。

「しっかり生きなさい。迷わず前をみて進みなさい。一人で生きるような人間にはなってはいけませんよ。仲間を信じて、そして守ってあげるのですよ。あなたは優しい子です。父を怨まないであげて下さいね。」

母様はいつもの優しい声で俺を宥めた。

「母様……。それは出来ません。父を怨まないなど、傷ついた使用人をもつと傷つけた人です。そして俺は知らない存在でしか無いのですから。そんな俺が仲間など作ってはいけないのです。」

俺は母様の言葉を信じる事が出来なかった。

俺の心の中の世界は乾いていた。

太陽は照り付け、風はふかず、砂漠が永遠に続いていた。

そして真奈美の小さなオアシスだけが涼しげに光っている。

前あった雅人と中道さんのオアシスは涸れはて形すら残っていない。

そんな感じた。

母様はそんな心を見たように悲しげな顔をして光の中にとけるように消えていってしまった。

「母様：いつてしまわれた。」

母様が消えたあと、あたりは真っ暗闇に包まれた。

闇の中は退屈で嫌な事ばかりしか出てこなかった。

果てしない暗闇からは嫌な笑い声がたくさんなり響き俺は闇に取り込まれた。

ずっと闇で体がなれていくと今度は嫌という程のまばゆい光が差し込んだ。

すると俺を呼ぶ声があたりに響き渡った。

光の奥には俺と同じくらいの手が俺に手を差し延べている。

怖く恐ろしい手ではなく、白くて綺麗で優しい手をしていた。

迷わず手をのばし、白くて綺麗な手と俺の手が混ざり合う。

その瞬間に、目を閉じなければいけないくらいの光が俺を包んだ。

光は消えているのかわからなかったが、思い切って目を開けてみると、俺は俺の部屋のベッドで寝ていた。

そして隣には中道さんと雅人がこちらを見て、嬉しそうに笑っていた。

第十三話：心

雅人は少し安心した顔をして俺に話し掛けてきた。

「坊ちゃん大丈夫ですか！？余り無茶をしないで下さい！それと旦那様の命令でこの部屋で監禁だそうです……。お食事は僕がお持ちします。学校は入院とさせて頂いてます。えっと？中道さんから聞きました。僕のクビ……。旦那様に伺いましたところ、認めていないということです。」

雅人はいつものように笑っていた。

「そうか……。わかった。雅人、お前はもう休まないでいいのか？もう……無理をするな。中道さん色々すいませんでした。そして中道さんと雅人にもうひとつ、内密にやって欲しい事があるんだが引き受けてくれるか？」

もう一人の場所じゃなくなる。

心の中の雅人達のオアシスが涸れたままなのに何かを失うような気がした。

そして、そこに一滴の水が上から落ちてきた。

砂漠にのまれ、すぐに消えてしまった。

一つの声が耳に届いた。

雅人の声……。

「何をしたらいいですか？」

やっぱり雅人は頭の回転がはやいな。

「俺の部屋から…右の廊下を真っ直ぐ進むと壁に隠し扉がある。その中には組み立ての梯子と鍵がある。それを使って天上のドアを開けて梯子を回収して、その中にあるハーモニカをとってきてくれな
いか？誰にも見られず、元どおりにして戻ってきてくれ。」

俺は目を閉じ少し休んだ。

そして中道さんは思った。

息遣いが荒いな……

頭で理解しているが体がついて行っていないみたいだ。

「行くぞ！雅人」

僕は少し不安だった。

坊ちゃんが誰にも教えてない場所があるなんて…

「あつ…はい！」

急いで中道さんを追い掛ける。

ゆっくり歩いているので聞いてみた。

「急がなくていいんですか？」

中道さんは目を輝かして言った。

「急いだら怪しまれるだろ！凄く楽しみじゃないか？あいつが隠していたものが見れるんだぜ。今は弱気というか悩んでいるというか……まあ、あいつらしくないよな。けどプライドが高くて無口であり本心を見せないやつだから……凄く嬉しいんだ。」

廊下をゆっくり進んでいくと曲がり角がある。

その壁をくまなく探すと横1センチで縦5センチくらい、へっこんでいる取っ手みたいのを見つけた。

そこをあけると鍵と梯子がでてきた。

それを出したあと隠し扉を閉じた。

誰もいない事を確かめ、梯子を立て天上にあるドアを鍵を使って開けた。

最初に上がった中道さんが驚き声をあげた。

「なんだよ！これ！」

そのまま中に入ってしまった。

僕も中道さんに続いて入った。

梯子を回収してドアを閉じて回りを見渡すと、窓がついた屋根裏部屋だった。

「す……すごい………！」

僕はその一言しか言い表せなかった。

とっても豊かで一人くらいなら暮らせるぐらいの場所だった。

第十四話：笑顔

ハーモニカがないか辺りを見渡したが小さな箱以外は見渡らなかった。

小さな箱…………。

僕はその小さな箱をゆっくり開けた。

そこには綺麗で清潔に保存されているハーモニカだった。

ハーモニカあった！

「中道さんっ！ありましたよ。ハーモニカ！！」

中道さんは、また目をキラキラさせて僕の方によってきた。

「おう！やっぱり面白いなあ！落ち着くし考え事とかするのには、ちょうどいい。しかも凄く長い折りたたみ梯子を持っている…。外への通路をつくろうとしたんじゃないか？」

無邪気だ…………。

まるで子供のようだ。

「それはないでしょう！」

僕はそう言ったが中道さんの言った事が間違いないだろう。

「ほら、中道さんおいてきますよ！」

はあー。

坊ちゃん。ちゃんと寝てるかなあ。

中道さんは後に続いて屋根裏部屋をでる。

綺麗さっぱり片付け急いで戻る。

中道さんは小走りで僕を追いかけてながら言った。

「おい……！？走るなよー！」

中道さんの言葉を見殺して僕は走り続けた。

バンッ！！

「坊ちゃんっ！」

走ってきた僕を驚いたようにみた。

「どうした！？走ってきて…！？」

つと問い掛け読んでいた本を閉じた。

「いえ…心配だったので」

少し顔を赤くしてたら中道さんがやっときた。

「ふう…。おい！雅人…。足速すぎ…！」

中道さん…。

やっぱり……………。

馬鹿っぽい。

ため息をついて、坊ちゃんの方を見る。

光るなにかが

坊ちゃんの頬を伝って落ちた。

涙……………？

………涙っ！

俺は中道さんも雅人も目を丸くしている事には気付かなかった。

俺は泣いているのか！？

何故…？

雅人達の一言がどうして……。

こんなに笑えるのか！？

俺は分からなかった。

「クスクスッ…。」

もう限界……！

「クツ！ハハハハッ！マジ訳分からん！」

久しぶりだ……！

いやっ！

最近だ……！

こんなに笑ったの！

真奈美の時以来か……！

そんなこんな考えていると雅人達はポカンと口を開けこっちを見ている。

「ああ、すまない。なんか分からないが笑いが止まらなくなてな……。」

雅人達に聞こえているのか分からないが……。

ポカンとした口が閉じ終わるのを待った。

だが雅人達はその口は閉じないで、そのまま歓喜の声をあげた。

まるで子供が産まれたみたいな歓喜の声だった。

「ぼ……坊ちゃんが笑った…笑った!!」

「悠一…！？笑ったんだよなあ、マジ！？初めて見た。」

何故か感動している雅人と中道さんに疑問を感じていた。

「どうしたんだ!？」

雅人はこつちをむきかえった。

「坊ちゃんがあそこまで笑う事は滅多にありませんから驚いてしまつて…。すいません…。って中道さんも坊ちゃんの変な妄想は止めて下さい!」

やっぱ馬鹿だっ!

頭いいのに馬鹿だな…

それに中道さんまで…!

あんなにガキだっただろうか?

「いや、かまわない…!何故だか分からないんだよ。わるいな。」

第十五話：雅人の逆鱗に触れた人（笑）

俺がそう言つと雅人は慌てて言い返しに来た。

「いえ、謝らないで下さい。坊ちゃん！」

オアシスがふき出したみたいな快感だった。

途中で中道さんは俺に寄つてきて髭でざらざらの頬をこすりつけた。

「痛い！痛い！中道さん？離れる…。」

凶器のような髭にこすられながらも手をのばした。

目の前にいる雅人に異変を感じた。

雅人は彼氏を取られた彼女みたいな目で中道さんを睨みつけていた。

嫉妬……………？

俺は中道さんの肩を突いて雅人の方に指差すと…。

中道さんは鬼を見たように雅人の方を見て固まっている。

雅人は不気味に笑いボソリと喋った。

「中道さん？どうしたんですかー？固まって……。」

怖い……

俺はそう感じていた。

普段あまり怒らない人はキレたら怖いと聞いたが本当だったと思っていた。

………！

はぁー！

俺の部屋には叫び声が響き渡っていた。

そんな中、俺は立ち上がり俺の部屋のベランダに小さなポストをつくっていると雅人が不思議そうにこっちを見ていた。

「何をなさっているのですか？こんな所にポストなど……？」

俺はポストの奥行きなどを調べている手を止めて言った。

「雅人に今度、紹介したい奴がいる。」

中道さんは、まるで猫が嫌いなものをずっと見つめているように影から俺達を見ている。

雅人はそれを無視をして俺に問い掛けてきた。

「紹介したい人ですか…？」

止めた手をまた動かし話しを進めた。

「ああ…。誰にも話すなよ。あいつは人と会う事を拒むから…。」

人と会うのを拒む…？

いったいどんな子なんだろうー？

しかもポストと何か関係が…！？

「はい。分かりました。この事は秘密にします。」

お坊ちゃんは、また真剣に作業を進めていった。

だから僕は、邪魔しないようにした。

だがあまりにもする事が無かったから、坊ちゃんのために料理を作る事にしたんだ。

中道さんは、お坊ちゃんの邪魔をしないように連れて行く事にした。

料理長の力をかりてやっとできたのが、お坊ちゃんが大好きなオムライスだ。

B級料理であるが、あれがたまらなく好きだった。

よく貴族はこんなの食べないと思われるものだって、興味などで食べている場合のほうが多いんだ。

後は、持つて行くただそれだけだった。

僕はお坊ちゃんの美味しいという言葉聞いたかっただけかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1330f/>

命を懸けた誓い

2010年10月21日22時14分発行